

Aセクシュアルの大学生が捉える自己と将来への展望
：インタビュー調査を通じて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 由希子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028085

A セクシュアルの大学生が捉える自己と将来への展望

—インタビュー調査を通じて—

松尾 由希子（静岡大学 教職センター）

要約：

本研究は、A セクシュアルの当事者学生 3 人のインタビュー等を通して、セクシュアリティに対する自己認識と将来展望について調査した。その結果、(1) A セクシュアルの特徴は、人によって異なる（グラデーションがある）、(2) 恋愛に関するメディア等に触れる際、恋愛感情としての「好き」という気持ちについて、共感ではなく分析の対象とする、(3) 性の多様性に関する知識の学習や性的指向の有る人との交流を通して、より自己肯定感を向上させ、将来設計をたてていく過程について示した。一方で、セクシュアリティの特徴より性被害にあうリスクについて指摘した。学校は、A セクシュアルの子どもの存在を認識し、その特徴をふまえて教育を行なう必要がある。

キーワード： 性的マイノリティ, A セクシュアル, カリキュラム, リスク教育, キャリアプラン

はじめに

本研究は、性的マイノリティの種類の一つである A セクシュアルについて、当事者の学生 3 名のインタビュー調査から、当事者が過去から現在までどのように自分のセクシュアリティを認識してきたか、そして今後についてどのように考えているか、という当事者の自己認識と将来展望について示すものである。3 名という少ない調査人数から、この 3 名の実態をもって A セクシュアルの傾向として一般化することはできないため、当事者学生の事例の 1 つとしてとりあげたい。

近年、性的マイノリティの認知は高まっている。「LGBT 意識行動調査 2019」の調査結果によると、性的マイノリティの総称として用いられる LGBT（以降、性的マイノリティの総称として用いる場

合、LGBT と記す¹⁾。) という言葉の認知は、91.0% だった²⁾。一方で「LGBT」（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー。以降、性的マイノリティの 4 つの種類を示す時は、「LGBT」と記す。) 以外の性的マイノリティの種類については、どうだろうか。著者が授業や教員研修時に、性的マイノリティの種類を尋ねると「LGBT」の言葉については認知の高さがうかがえるものの、それ以外の種類、例えば X ジェンダーやクエスチョニング、A セクシュアル等まで知っている人はほとんどいない³⁾。

セクシュアリティが認知されない弊害としてどのようなことが考えられるか。さまざまなことが考えられるが、例えば学校教育においてセクシュアリティに対応した教育が受けられない点を指摘できる。具体的にいうと、1 つに、今日の学校は 2015 年の文部科学省の通知「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施等について（通知）」（以降、2015 年通知と記す）により、性的マイノリティの児童生徒からの相談があれば、学校や教員は対応しなくてはならないが、教員が認識していないセクシュアリティの子どもは支援の対象から外れる可能性がある。2 つに、教員から見えない存在であるため、自身のセクシュアリティについて教えられないことで、自身の存在に疑問を抱いたり、セクシュアリティに適した必要な情報を受け取れなかったりする可能性もある。本研究では日本においてほぼ認知されていないと考えられる A セクシュアルをとりあげる。A セクシュアルは、性別問わず他人に対して恋愛感情を持たないかつ（または）性的に惹かれることのないセクシュアリティである。

今日の日本において、A セクシュアルの実態について知ろうとする時、書籍や論文を介しての情報入手は難しい。日本国内において 2019 年に A

セクシュアルに関する書籍として、海外の書籍の翻訳書⁴⁾が出版されたが、それ以外は管見する限り出版されておらず、日本国内の研究論文も他の性的マイノリティの種類に比べると少なく、発表されている研究のほとんどが、文献研究である⁵⁾。ただし、2020年11月1日付で「アロマンティック／アセクシュアル・スペクトラム調査2020概要報告」⁶⁾(Aro/Ace 調査実行委員会 2020)が発表された。当事者1685人を対象に行なった量的調査であり、今後分析や研究を進めていく際の貴重なデータになるだろう。このように、量的調査が報告されるようになった段階であり、まだAセクシュアルの実態はとらえにくい現状にある。そのため、Aセクシュアルとはどのようなセクシュアリティであるか、少ない事例であるが当事者のセクシュアリティの捉え方と将来展望等を中心にセクシュアリティの特徴を示す。さらに、今日学校等でAセクシュアルが見えない存在になっていることで引き起こされる問題について示す。本研究において「好き」と記す場合、特に注記が無い時は恋愛等「性的指向」に関わる内容として用いる。

1. Aセクシュアルの特徴とカリキュラムにおけるとりあげられ方

(1) Aセクシュアルについて

①どのくらい存在するか

Aセクシュアルと自覚する人はどれくらい存在するのか。「LGBT意識行動調査2019」において、国内の調査では初めて、性的指向の中で「Aセクシュアル」の調査結果が発表された。性的マイノリティ人口の調査は、調査ごとにセクシュアリティ別分布の数値に差がみられるが、この調査によるAセクシュアルの出現率は0.9%である⁷⁾。イギリスにおける1万8000人の成人を対象に行なったアンケート調査結果は1%⁸⁾であったため、日本の割合とほぼ変わらない。

Aセクシュアルには、恋愛感情を抱くが性的には惹かれない人、または恋愛感情を抱かないが性的には惹かれる人も存在している。このような特徴を有する人は、自身のセクシュアリティを説明する際に、Aセクシュアルまたは(かつ)性的指向

の有る同性愛者・異性愛者・両性愛者等を選択していると考えられる。

②セクシュアリティの特徴

Aセクシュアルは性的指向の種類の一つであり、病気ではないため治療の対象にはならない。Aセクシュアルは「ほかの人に性的に惹かれたり性的に好ましい気持ちを抱いたりしない⁹⁾」というように、恋愛感情や性的欲求を抱かないという特徴がある。ただし、Aセクシュアルの中にもさまざまなタイプがあり、そのいくつかの例を示す。

1つに、性的にも惹かれないかつ恋愛感情も持たないタイプである。2つに、性的には惹かれないが、恋愛感情を持つAセクシュアルの人は「ロマンティック・Aセクシュアル」(以降、ロマンティックと記す)と称される。性的に惹かれることと恋愛感情には、相関があると考えられてきたが、性的要素のない恋愛も存在する。この状況は、人として未発達というわけではなく、セクシュアリティの特徴として存在している。

他にも「デミセクシュアル」「グレイセクシュアル」等のタイプも存在する¹⁰⁾。「LGBT」について、それぞれのセクシュアリティの中でも人によって特徴が異なるのと同様に、Aセクシュアルもグラデーションがあるといえる。

(2)カリキュラムにみるAセクシュアル—学習指導要領と教科書より

戦後から今日までに、文科省が告示する全学校種の学習指導要領では、性別二元制及び異性愛という性的マジョリティのみ記述され、性的マイノリティは存在していない¹¹⁾。そのため、Aセクシュアルの存在も学習指導要領に記載されたことはない。

一方で、教科書については、民間(発行者)の判断で学習指導要領の内容に追加することも可能であるため、性的マイノリティをとりあげる出版社も存在する¹²⁾。1990年～2019年度の検定済教科書を対象に、性の多様性に関する記述内容について調査した結果、全体の教科書点数に比べると性の多様性や性的マイノリティをとりあげる教科書は多いとはいえないが、2019年度検定済教科書までに全ての学校種でとりあげられたことがわかる。

ただし、A セクシュアルについてとりあげた教科書は、高校家庭科の 2016 年度検定済教科書全 17 点のうち 1 点のみである。以下にその内容を示す。

「確かな性知識を学ぶことはより慎重な行動を促し、個人や相互の幸せな関係にもつながる。だから性に対する関心や行動はあせる必要もないし、なかには性愛の対象や関心を持たない『ア (A) セクシュアル』といわれる人もいる。」¹³⁾

性的マイノリティをとりあげた教科書について、性的指向に限ると、全てに同性愛は記載されている。しかし、A セクシュアルは上記した高校家庭科教科書 1 点のみである。学習指導要領でとりあげられていないことで、学校教育で性の多様性について学ぶ子どもは限られている。さらに、A セクシュアルに関しては「LGBT」に比べると、学校教育を通じて学ぶ機会はほぼ無いと推測される。

2. A セクシュアルを自覚する大学生へのインタビュー調査の概要

(1) 調査の方法

①ワークシートへの記入にもとづくインタビュー及びディスカッション (2020 年 9 月 24 日、2 時間程度)

A セクシュアルの学生 3 人 (以降、具体的に特定する場合 A さん、B さん、C さんと記す。) と性的指向の有る 2 人 (シスジェンダー男性・ゲイ・学生、シスジェンダー女性・ヘテロセクシュアル・卒業生) へのインタビュー及びディスカッションを行なった。5 人の調査協力者は、セクシュアリティについて学ぶグループのメンバーであり、卒業生は在学時に所属していた。このグループは 1 週間に 1 回程度ミーティングを行ない、そのほか不定期に論文購読やテーマを設定したディスカッション等を行なっている。そのため、自身のセクシュアリティについて話すことやメンバーの話聞くことは、珍しいことではない。また、調査協力者は調査当日以前より互いに面識がある。著者についても、以前よりこのグループのミーティングや勉

強会に参加しており、調査協力者全員と面識がある。なお、調査を行なった 2020 年度において、調査協力者の中に著者の授業を受講する学生は含まれておらず、2021 年度以降についても受講予定者はいない。調査当日は、不定期に行なわれているセクシュアリティに関する勉強会を兼ねていたため、調査対象は勉強会の参加者全員ではなく、本調査への了承を得られた人である。調査当日、勉強会には著者をのぞくと 6 名が出席した。6 名のうち 5 名がセクシュアリティについて学ぶ勉強会のグループのメンバーであり、この 5 名から調査協力への承諾を得た。

インタビュー及びディスカッションの前に、参加者全員に「これまでのふりかえりと今後について (人生振り返りシート)」のワークシートを配布し、10 分程度で記入してもらった。このワークシートは時期 (就学前、小学校、中学校、高校、大学、社会人、将来) にわけて、13 の項目で構成される。この 13 の項目は、著者が設定した「人生にとって幸せであると考えること」や「セクシュアリティの特徴によりリスクを感じていること」をのぞくと、セクシュアリティについて学ぶグループのメンバーが設定した。調査協力者の 1 人が調査日より前に、ディスカッションで話し合いたいテーマをグループの中で募集し、集まった内容より構成している。その結果、「A:セクシュアリティの自覚前にしていたこと」、「B:セクシュアリティの自覚 (きっかけ)」、「C:セクシュアリティへの葛藤」、「D:セクシュアリティの流動」、「E:恋愛経験など」、「F:周囲の言動で不快に感じたこと」、「G:自身のセクシュアリティで肯定的にみている点」、「H:自身の評価、自己肯定感など」、「I:カミングアウト状況」、「J:使用する一人称」、「K:将来の展望や不安なこと」、「L:セクシュアリティの特徴によりリスクを感じていること」、「M:人生にとって幸せと考えること」という 13 項目になった。項目によっては、例えば「C:セクシュアリティへの葛藤」のように時期 (学校段階等) により心情が変化する可能性もあるため、ワークシートは時期ごとに記入するようにして、変化が時系列で視覚的にわかるように工夫した。このような経緯により、項目を設定したため、項目の全てが A セクシュアルの人のみを想定したもので

はない。そのため、本研究では A セクシュアルの特徴に関係のある項目を抽出して分析、考察する。

調査時には、記録のために調査協力者の発言内容についてメモをとり、当日中に逐語記録化した。

②A セクシュアル学生 3 人への個別インタビュー (2020 年 9 月 26 日及び 10 月 1 日、各人 90 分程度)

A セクシュアルの学生 3 人を対象に、時間の都合により、1 回目の調査 (インタビュー及びディスカッション) で十分にきくことのできなかつたワークシートの項目を中心に、項目以外の内容についても追加して質問を行なった。

調査時には、記録のために調査協力者の発言内容についてメモをとり、当日中に逐語記録化した。

これら 2 つの調査より、A セクシュアルの特徴に関連する項目を抽出し、内容の類似性を検討して整理し、カテゴリー化した。なお、本研究はディスカッションとインタビューという 2 つの調査を組み合わせているため、それぞれの語りの均質性について限界がある。ディスカッションは複数で行なうため、他の人を意識して自身について話しづらかったり、他者の意見にひきずられてしまったりすることも考えられる。しかし、本研究の調査協力者は互いに面識があり、自身や他の人のセクシュアリティの話について、話したり聞いたりする経験を重ねている。そのため、ディスカッションのデメリットとして考えられる話しにくさや他の人の話に影響を受ける点について、面識のないグループに比べるとその影響は大きくないと判断した。したがって、2 つの調査の均質性に関する限界性に考慮しながら、2 つの調査を組み合わせる分析及び考察を行なうこととした。

(2) 調査対象

主な調査対象である A セクシュアル学生の属性について、表 1 にまとめた。

	性自認	性的指向	性の多様性に関する知識	性的マイノリティの人たちとの交流期間
Aさん	シスジェンダー女性	Aセクシュアル	有り	約3年
Bさん	シスジェンダー男性	Aセクシュアル	有り	約3年
Cさん	クエスチョニング	Aセクシュアル (ロマンティック・ゲイ)	有り	約5ヶ月

2020年11月末日現在

註
「性的マイノリティの人たちとの交流期間」は、セクシュアリティについて学ぶグループへの所属期間をさす。

(3) 調査手続き及び倫理面への配慮

本研究は 2 つの調査を行なった。

①インタビュー及びディスカッションについて

セクシュアリティについて学ぶグループに了承を得たうえで、勉強会に出席するメンバーに調査概要の書面 (「A セクシュアルの大学生が抱える自己についてのインタビュー及びディスカッション調査概要」) を用いて説明した。書面は①調査趣旨、②調査の方法、③記録の取り扱い、④研究協力の同意、⑤記録の公表と保管・廃棄で構成している。

「①調査趣旨」について、調査目的及び研究で得られる知見を示した。「②調査方法」について、2 (1) にも記した具体的な調査方法のほか、「答えたくない質問や話したくない内容について」回答する必要はないことと回答しないことにより不利益を被ることはない旨を記した。「③記録の取り扱い」について、発言内容はメモとして記録すること、メモの内容は速やかに逐語記録化し (逐語記録作成の際は個人が特定されないように情報を取り扱う)、紙媒体や電子メールで調査協力者に示すこと、調査協力者にはその内容を確認してもらい修正が必要であれば指摘してもらい、それをもとに著者が修正することとし、修正作業が終わった調査データを使用すると記述した。さらに、論文を提出する前に調査に関わる記述部分について、匿名性の保持及び事実の齟齬が無いという点を調査協力者に確認してもらったことも記した。「④研究協力の同意」について、「調査への協力の同意」「調査の記録使用の同意」の 2 点について、それぞれの同意書に必要事項を記入してもらったことで同意を得たものとするを記した。同意書に必要事項を記入する

までの間に協力の撤回は可能であり、協力の撤回により個人に不利益が生じないことを記した。「⑤記録の公表と保管・廃棄」について、調査のデータは学術論文等のデータ、教職員向けの研修会資料等に使用する旨を記した。また、記録の保存場所と期間、所定の保存期間後のデータの削除に方法について記した。また、メモとして記録したものは調査への協力が撤回された時に完全に消去することを記した。

このような内容で構成した調査概要の書面を口頭で説明した後、了承を得られた5人に1つめの同意書（「インタビュー及びディスカッション調査協力」）に必要事項を記述してもらった。後日、逐語記録及び論文の該当箇所を確認が終わった後に、2つめの同意書（「インタビュー及びディスカッション調査記録使用」）に必要事項を記述してもらった。なお、2点の同意書には「説明を受けて理解した事項」として、「研究計画の概要に関する事項」「個人情報保護の方法に関する事項」「同意に関する事項」を記述した。

②個別インタビュー

2回目の調査は個別インタビューになる。1回目の調査後に、対象者3人それぞれに調査概要の書面（「Aセクシュアルの大学生が抱える自己についてのインタビュー調査概要」）を用いて説明を行なった。書面の内容は、1回目の調査概要とほとんど変わらないが、調査対象が異なる。よって、「②調査方法」に含める調査対象として1回目の調査後に個別インタビュー調査への「協力可」と回答したAセクシュアルの学生である点を記した。また、調査概要の書面のほか、インタビューガイド（「調査の流れ・インタビューガイド テーマ：Aセクシュアルの大学生が捉える自己について」）の書面を用いて、「インタビューの概要説明」、「9月24日の調査の追質問」の内容など、インタビューの流れとその内容について説明した。「調査概要」及び「インタビューガイド」の説明後に、調査協力に了承を得られた3人に、まず1つめの同意書（「インタビュー調査協力」）に必要事項を記述してもらった。後日、逐語記録及び論文の該当箇所を確認が終わった際に、2つめの同意書（「インタビュー調査記録使用」）に必要事項を記述してもらった。2回目

の調査の同意書についても、1回目の調査の同意書と同様に、「説明を受けて理解した項目」を記し、調査協力者は確認のうえ、必要事項を記述した。

3. Aセクシュアル学生の現在までの自己の認識と将来展望—調査の結果

(1) セクシュアリティの自覚について

①セクシュアリティを自覚した年齢

自身のセクシュアリティを自覚したのは、3人のうち2人（Bさん、Cさん）が大学入学後であり、1人（Aさん）が高校3年生の時だった。Aセクシュアルというセクシュアリティを知ったきっかけについて、Aさんは恋愛感情を抱かない自身を不思議に思い、インターネットで検索して知った。BさんとCさんは大学の授業¹⁴⁾及び授業後に関連する書籍を読んだことで知った。Cさんについては、海外のニュースでも見る機会があったという。

Aセクシュアルは、他者に対して恋愛感情を抱かず、性的魅力を感じないというセクシュアルである。恋愛感情や性的に惹かれないという「無い」ことの証明は難しい。実際、Bさんは「そのうち自分にも好きな人ができる」と思っていたと話す。自身がAセクシュアルであると認識する根拠をきいたところ、「文献を読み、人の話を聞いて、自分はAセクシュアルである」という自覚に至ったという。ロマンティックであるCさんは、異性である女子よりも男子が視界に入っていたが、それは恋愛感情なのかはわからないという。確実にいえることは、それは性的に惹かれたわけではなかったし、大学入学後もその感覚は変わらなかった。

以上、3人のインタビューより、自身のセクシュアリティを自覚した年齢は高校3年生以上であり、他のセクシュアリティと比べて遅い傾向にある¹⁵⁾。Aセクシュアルを知るきっかけは、インターネットに加えて大学の授業や大学教員とのやりとりであった。高等教育による学習機会から情報を得ている点から、Aセクシュアルは一般的に認知されていない点や「無いこと」の根拠は「有ること」に比べると証明が難しいため「人は恋愛に関心を持つものだから、時がくれば好きな人ができるだろう」等と思えば、調べるという行為に結びつきにくく

なる状況がうかがえる。

②セクシュアリティへの葛藤

Bさんは、A セクシュアルの自覚前後ともに葛藤はない。A セクシュアルを知る前は「自分にもいつか好きな人ができるだろう。」とっていたからだという。一方で、Cさんはゲイ（ロマンティック）と認識したのは中学生くらいだった。当時、周囲の生徒やメディアにおいて、ゲイへの偏見や差別の言葉が多く、周囲に自身のセクシュアリティを言えないし、知られてはいけないと思っていた。A セクシュアルについては、上記の通り大学の授業等で知ったものの葛藤は生じなかった。ゲイというセクシュアリティについて、性の多様性を学ぶなかで、「異性愛でなくてはいけない」とは思わなくなり、寛容に捉えられるようになった。Aさんは大学入学後、性的マイノリティの人たちと話す機会が定期的にあったことから、性的指向の有る人（同性愛者・異性愛者・両性愛者等）の行動や考え方が自分と異なると感じて、恋愛感情を抱かず性的にも惹かれないというA セクシュアルの自覚が強化されたが、現在は「A セクシュアルの中でもロマンティックかもしれない。」という感覚もあるという。

(2) セクシュアリティの流動性について

BさんとCさんに流動性は無い。ただし、Aさんについては上記したように、「ロマンティックかもしれない」と感じているため、A セクシュアルの状態の中で揺らいでいる。

(3) 恋愛経験や交際経験の有無について

3人とも恋愛経験はなく、性的指向の有無を確認するために試しに交際する等の経験もない。Aさんは、自身に「好き」という気持ちが無いのに付き合うのは相手に失礼であると考えている。Bさんは、「誰かを好きになれないのだろうか。」と考えたことはあり、想像してみたが、今までに経験したことのない「好き」の感情がわいてくることはなかったという。

(4) 周囲の言動で不快に感じたことについて

3人に共通していた点は、2点である。1つは、

「好きな人」をきかれることである。「めんどくさい」「うっとおしい」と感じている。2つは「好きなタイプ」をきかれることである。聞かれてもわからないので、嫌というよりも困惑してしまうという。ただし、後日の個別インタビューで、Cさん（ロマンティック）は「よくわからないけれど、自分には好きなタイプはあるかもしれない。」と話した。性的指向の有る2人に、「好きな人」について聞かれた時の気持ちを尋ねたところ、A セクシュアルの3人が感じたような不快な気持ちは生じていなかった。性的指向の有る2人には「好きな人」がいる時といない時があり、聞かれた時にその状態を答えるだけであるという。一方で、A セクシュアルの3人は、常に「好きな人」がいない状態であるのに、それをふまえない問いが繰り返されることに対して不快な気持ちが生じているものと考えられる。

また、「好きなタイプ」について、性的指向のある2人は具体的に体型や容姿をあげてすぐに回答した。「好きなタイプ」を聞かれて困惑するA セクシュアルとは対照的である。ただし、2回目の追加のインタビューの際にCさんが「好きなタイプはあるかもしれない」と話したことから、A セクシュアルでも「好きなタイプ」を認識する人もいるのかもしれない。

上記のほかに、Cさんは小学校から中学校まで、プールやトイレや修学旅行先のふろ場等で体をみられるのが嫌だったと話した。また、大学では「1人で生きていくには限界がある。」「社会人になると彼女がほしくなるよ。」といわれて不快な気持ちになったという。この発言は、性的指向の有ることやパートナーとの暮らしが前提となっており、A セクシュアルにとっては自身のセクシュアリティや生き方を否定されることにつながるだろう。

(5) 自身のセクシュアリティで肯定的に捉えられる点について

Aさんは、「好きなタイプ」がいないため、特に外見にはこだわらないことと、「好き」ということについてわからないために普段から「好きとはどういうことか。」について考えていることをあげた。Bさんは、男性も女性も恋愛の対象にならないた

め、相手を意識しなくてもよいことをあげながら、特によかったことはない、という。Cさんは、人の恋愛に嫉妬しない点をあげた。また、人と接するうえで恋愛の距離感がわからず、距離を誤ったかもしれないと思う時はあるが、「男性であるため性被害等に合うリスクが無い。」と答えた。

(6) 恋愛ドラマや実際の恋愛の話をきくことについて

3人ともに「好き」「おもしろい」と回答した。3人に共通していたのは、恋愛ドラマや人の恋愛話は、「恋愛とは何か」を知るための分析対象という点である。Aさんは「好奇心がある。付き合うとこの人はこのように変わるんだ。このように好きになっていくのだ、という視点で見ている。」と話した。3人ともに「恋愛によって人が幸せそうにしているのを見るのが好き」と回答した。つまり、Aセクシュアルにとって、ドラマ等は恋愛感情に共感してみるものではなく恋愛について学ぶものであるが、恋愛をする人たちから生じた「嬉しい」「楽しい」気持ちに共感していた。また、友人等の恋愛の話は、現実の話であるため、ドラマよりもより話を聞くのが楽しみだという。Bさんは分析という観点のほか、恋愛する人たちを応援する気持ちもあるという。

性的指向の有る2人は、恋愛ドラマについて共感や疑似体験としてみていると話した。また、その1人は自身の恋愛がうまくいっていない時に人の恋愛の話を聞くと羨ましいという気持ちが生じると話しており、(5)でAセクシュアル学生が「人の恋愛に対して嫉妬しない。」と話したことと対照的である。Aセクシュアルは恋愛を自身のこととはとらえず、「好き」について分析するための対象としている。知らないものについて学び、それをおもしろい、楽しいことと捉えていた。

(7) 自己評価や自己肯定感について

Aさんはセクシュアリティに関わらず、自身の自己肯定感は低いと認識しているという。Cさん(ロマンティック)は、3(1)②に記したように中学校の時にゲイを自覚したことで、自己肯定感が低下した。ただし、大学で性の多様性について授業

で学び知識を得たことで、セクシュアリティを受け入れるようになった。Cさんは、授業や海外のニュースでAセクシュアルを認識する前まで「思春期になると人は性に対する関心が高まってくるとあったのに、そうならない自分は未熟である。」と思っていたが¹⁶⁾、大学の授業等でAセクシュアルを知り、「自分もAセクシュアルかもしれない。」と自身の状態を納得した。Bさんは、性の多様性に関する授業や教員等とやりとりをする中で、自分のセクシュアリティを自覚した。勉強したことで理解が深まったという。自身に「好きな人がいないのは、セクシュアリティの特徴である」ことがわかったため、自己肯定感は上がっている。このように、Aセクシュアルというセクシュアリティを認識したことで「性的に惹かれない」「恋愛感情をもたない」自分について発達上未熟であると感じていたことや戸惑いの感情が解消されている。また、授業等で正しい知識を得たことで自己肯定感が向上したと評価した人もいた。

(8) カミングアウトの状況について

現在の日本において、カミングアウトとは「誰かに対して、これまで話していなかった自分に関することを伝えること、特に、相手が予想していないようなことを伝えるという広い意味で」用いられている¹⁷⁾。石丸径一郎は、ゲイ、バイセクシュアル、レズビアンにとってのカミングアウトという行為について、失敗した場合には拒絶や噂の広がり等も考えられるため、リスクの高い行為と指摘したうえで、「カミングアウトしようとする相手の価値観や状況を十分に検討した上で慎重におこなう必要がある¹⁸⁾」と述べる。ただし、Aセクシュアルのカミングアウトの先行研究(国内)については、管見する限り見当たらない

AさんとCさんは、ほぼカミングアウトをしていない。Cさんについて、家族は恋愛や結婚をするべきものにとらえていないため、話す必要が無いと思っている。Bさんはカミングアウトというより、雑談をする中で家族に自身のセクシュアリティを告げた。Aセクシュアルの特徴についてきかれたため、説明したという。このことから、認知度の高い「LGBT」とは異なり、Aセクシュアルは認

知度が低いために、多くの場合伝えた後にセクシュアリティの説明を要することが考えられる。また、A セクシュアルの特徴が知られていないために「考えすぎである」「将来はわからない」等、現在のセクシュアリティの状態を正確に理解してもらえない可能性もある。「LGBT」のカミングアウト直後については受け手側に戸惑いや拒絶や受容等の感情が生じるといわれるが、A セクシュアルのカミングアウトは、まず正確にセクシュアリティの特徴を理解してもらったところから始まるため、「LGBT」とは異なるカミングアウト及びその後の経過をたどることが予想される。

(9) 将来の展望や不安なことについて

Aさんは、恋愛でなくても大切に思えるパートナーが欲しいと考えており、そのような相手と出会えて、自身のセクシュアリティを理解してもらえたら結婚もしたいと話す。Bさんはセクシュアリティに関係した悩みは無い。人と関わるのは嫌いではないが、1人であることは苦痛ではないため、結婚はしなくていいと考えており、働いて自分の趣味を大事にしたいと考える。親やきょうだいとの仲は良好であり、困ったら助けてもらえるため、結婚しなくてもよいと思うと話した。AさんBさんともに、1人で生きていく可能性があるため経済的自立の重要性を強く感じていた。Cさんは不安なこととして、孤独をあげて、1人で生きるための人間関係を築きたいと話した。このように、3人のうち2人はパートナー不在による1人で生きていくことの不安を感じていたが、一方で今後の人生において恋愛が介在しない人間関係を構築しようと考えている。残る1人は、危機に際した場合に支援してくれる存在として、家族をあげた。以上より、3人ともに恋愛でつながるパートナーの存在が絶対とは考えておらず、家族等パートナーに代わる存在がいることで問題なく過ごせると感じていることもわかる。

(10) A セクシュアルの特徴によるリスクについて

Aさんのみ、リスクについて回答した。Aさんは恋愛や性に関わる場面において、人との距離感

がつかめないことで生じる性暴力の被害に合う可能性をあげた。「(相手は自分のことを恋愛対象としてはとらえていないので)大丈夫だろうと思っていたが、そうでないこともあった。こちらは相手に恋愛感情を持っていなかったが、相手の家に行く等自分の言動が相手を誤解させてしまった。相手の思いに応えられないことに対して申し訳ない。」「初めから自分に恋愛感情を持たないという確約があれば、安心してその後も付き合えると思う。」という。Aさんはシスジェンダー女性である。親しい男性の家に遊びに行った²⁰⁾こと等について、Aさんは恋愛感情をもっていなかったが、Aさんに恋愛感情を持っていた相手に「双方ともに恋愛感情を持っているかもしれない」という誤解を生じさせることに繋がったかもしれないと話した。

2(5)において、Cさんも「人と接する時に恋愛とそれ以外の距離感がよくわからない」と話しており、A セクシュアルはセクシュアリティの特徴により、恋愛対象としての「好き」な人とそれ以外の人(例えば友人等)との距離感の違いがわからず、戸惑っている状態がうかがえる。自身が恋愛感情を抱かず、性的に惹かれられないため、自分に向けられる感情について認識しにくいものと考えられる。その結果、意図しない性暴力にあう可能性もあるため、Aさんはセクシュアリティによるリスクとしてあげた。ただし、性被害は恋愛感情を伴わない関係でも起こるため、性暴力が起こるかもしれない場面について認識することはリスクを避けるうえで必要になる。

(12) 人生にとって幸せと考えていることについて

Aさんは、恋愛でなくても愛の形は色々存在していると考えている。Aさんにとっての幸せは恋愛以外にも「愛を行なえる」ことであり、例えば人への感謝等を大切にしながら生きていきたいと話した。Bさんは、自分の時間を自分の趣味等自由に使えることをあげた。Cさんは生きていてよかったと思うことをあげた。このように、3人にとっての幸せはそれぞれ異なるが、恋愛に関わらない内容をあげている点は共通している。

(13) その他

ワークシートの項目の他、以下の質問も行なった。そのうちの2つを示す。

①自身とパートナー等との子どもについて

3人とも共通して、特に自分の血縁の子どもは望んでいない。Aさんは「積極的に希望しないが、パートナーをととても大事に思えて、この人の子どもだったらと思えたら出産の可能性もあるかもしれない。そのように気持ちを高めるのはかなり難しいけれど。」と話した。子どもを希望しない理由に子どもを愛情深く育てるのは大変だという意識があるという。Bさんは年齢の小さい子どもがあまり好きではないという。

②A セクシュアル等、多様な性の知識を得て自身の変わった点について

Aさん及びBさんに共通するのは、恋愛について客観視できるようになった点である。Aさんは、恋愛している人を見ても、自分も恋愛しようとは思わなくなったという。BさんはA セクシュアルを知る前までは、「自分はどうやったら人を好きになれるだろう。」と思っていたが、現在は「好きとはどういうことか」というように、「好き」について客観的に考えるようになった。

Aさんは、大学で性的指向の有る人たちの話を聞いて、恋愛はうまくいかない時もあるという側面を知るようになり、恋愛への憧れはなくなった。また、Aさんにとって異性愛者、同性愛者、両性愛者等は、性別関わらず人を愛するという点で性的指向のある人たちという括りになり、「みんな同じだと思う。大学で性的マイノリティ当事者・非当事者の人たちと話をすることでそう思えた。」と話した。

Bさんは、本で学び、性的マイノリティ当事者・非当事者と話をすることでいろんなセクシュアリティを知ることができてうれしいし、楽しいと話す。その過程を通じて、それまでは「なぜ、そのようなセクシュアリティになるのだろう。」と疑問に感じたこともあったが、今までは「ふつうにいろんなセクシュアリティの人がいる。自分にはわからない感覚であってもそういうセクシュアリティはあるのだ、と思うようになった」と話す。

Cさんは、A セクシュアルを知ったことで自身

への違和感が解消されたという。性的指向はゲイであるため、性的関心をもつはずだけれどそうはならなかった。自身を「異常だと思っていたし、未発達と感じていた。しかし、A セクシュアルの存在を知ったことでそのような状態があるとわかり違和感が解消された。ただ、知ったからといって今後どのように生きようという将来設計などは特に無い」という。しかし、3 (9) の不安である点について「孤独」をあげて「人間関係を構築したい」と将来について話している。

4. 考察

「はじめに」で示したように、本研究は3人のA セクシュアル学生の事例であり、一般化はできない。しかし、調査の結果、セクシュアリティの特徴が見えてきたため、一般化の限界をふまえつつ、考察を示す。

(1) A セクシュアルもグラデーションである。

3人のうち1人は、恋愛感情をもつロマンティックであり、2人は性的にも惹かれず恋愛感情を持たないという特徴がある。しかし、1人は大切に思えるパートナーを欲しいという感情があるため、ロマンティックかもしれないと揺れている。このように、A セクシュアルの中でも異なる特徴を有していたり、1人を見ても時期や経験により自身の捉え方が変わったり等、A セクシュアルも他のセクシュアリティと同様にグラデーションや流動性があると考えたほうが良いだろう。

(2) 「好き」という感情は共感ではなく、分析対象とする。

ドラマや友人等の恋愛に関する話は、「好き」という気持ちや恋愛関係と友人関係の違いを知るためのツールとしてとらえていた。3人ともに自身をA セクシュアルと自覚しているため、ドラマ等を見聞きしながら「好き」について客観的に分析する。「聞いたり見たりすることが楽しい」という根拠に「わからないから知りたいと思う気持ち」をあげた。「好き」という気持ちは感覚的であるため言語化は難しいと思われるが、3人とも「好きという感

情についてよく考える」と話し、人の関係が恋愛へと変化する時の言動の違い等、恋愛に関わる言動を詳細に観察し、分析している。自身のセクシュアリティを受容していない場合、「好きな人ができない」ことについて悩むかもしれないが、調査協力者3名は現在、自身のセクシュアリティを肯定的に捉えているため、「好き」について知る機会を楽しんでいるのかもしれない。また、3人ともに恋愛により人が幸せそうにしていることが嬉しいというように、恋愛には共感していないものの恋愛をする人の幸せな気持ちのほうに共感していた。

調査協力者は、性的指向の有る人と無い人で分けて捉える傾向にあり、例えば性的指向が有る異性愛者も同性愛者も人を「好き」になるという点で同じであるといい、恋愛小説もセクシュアリティの区別なく読み、特定のセクシュアリティに対するフォビア（嫌悪感）も無かった。

(3) セクシュアリティの自覚と将来展望

①性の多様性の知識を学ぶことで、自己を認識し将来について考える。

自身をAセクシュアルと自覚する前までは「いつか、自分も人を好きになるだろう。」「なぜ、友達は恋愛しているのに自分は好きにならない（性的に惹かれないのだろう）。」と、恋愛に対する将来への期待や自身への戸惑いを感じていたが、Aセクシュアルというセクシュアリティを知り自覚してからは、自身が恋愛の当事者になることに強いこだわりはなくなり、将来の過ごし方や恋愛関係以外の人間関係構築や経済的自立について考え始めるようになった²⁰⁾。3人のうち2人は孤独への不安を語っているが、孤独への不安は恋愛関係にある人以外でも解消できると考えており、そのため人間関係づくりへの意欲をもっていた。また、1人については家族に自身のセクシュアリティを話しており、家族を頼りにできると感じている。このように、恋愛対象としてのパートナー不在の可能性をふまえた人生設計をたてようとしている。

②性的指向の有る人の言動から、自身のセクシュアリティを認識する。

調査協力者は、Aセクシュアルと自覚した後に、特に性的指向の有る人と交流し、性的指向の有無

による感じ方の違いをより認識し、自身のセクシュアリティについて認識を深めていた。性的マイノリティが、同じセクシュアルティの人との出会いにより、自身のセクシュアリティについて肯定的に受容していくことは研究上もすでに指摘されている²¹⁾。しかし、本研究の調査協力者については、同じセクシュアリティの人と話すよりも、性的指向の有る人から聞いた話をもとに恋愛等の分析を行なう中で、自身のセクシュアリティを深く認識していく傾向があり、他のセクシュアリティの認識の過程において違いがうかがえた。

③セクシュアリティを肯定的に捉える。

3人ともにAセクシュアルというセクシュアリティの存在を知ると同時に自身のセクシュアルであると自覚するが、不安の解消や自己理解に繋がっているため、肯定的に捉えていた。ただし、ロマンティックのCさん及び性的指向の有る調査協力者の1人はゲイであり、ゲイを自覚した際に2人ともに自己肯定感は低くなっていた。その理由に、当時彼らの周囲にいた人やメディアにおいてゲイは嘲笑の存在だったことをあげる。そのため、絶対に知られてはいけないと考えていた。一方で、Aセクシュアルはゲイに比べてほとんど認知されていないセクシュアリティである。そのため、肯定的に捉えられることもないが、嘲笑の対象にもならない。したがって、Aセクシュアルの3人は、Bさんが述べたように「自分が何者かわかった。」という所属感を伴う思いのみが生じたと考えられる²²⁾。

2人のゲイの学生は、大学入学以降に自身のセクシュアリティを受け入れていく。その背景に性の多様性に関する知識の学習や性的マイノリティの人との出会いがあった。さらに、異性愛と同様に男性同士の恋愛を肯定的に描く作品が多いタイのBL（ボーイズラブ）ドラマの視聴を通じて、自己肯定感が向上したと話す²³⁾。このことから、知識の習得や性的マイノリティの人たちとの交流に加えて、メディアが性的マイノリティのセクシュアリティについて肯定的なメッセージを示すことで、当事者の自己肯定感の向上に寄与していることがわかる。今日、Aセクシュアルについてとりあげるメディアはほとんどない²⁴⁾が、認知が広がった際には当事者の自己肯定感を下げないようとり

あげ方を期待したい。

(4) 性被害にあうリスクの存在

Aさんは、自身に向けられた恋愛感情に気づかないまま、2人で出かけ、家を訪問することがあり、後に恋愛感情を告げられた。Aさんは、この状況について「自分は距離感がつかめない」と話した。自身がAセクシュアルであるため、性的指向の有る人の感情と言動を認識できず、「相手に恋愛感情を抱いていないことを示す適切な距離感」がはかれないという。Aセクシュアルはセクシュアリティの特徴上、恋愛に関わる経験が少ない場合、性的指向の有る人の感覚はわかりにくく、「好き」の気持ちや性的欲求から生じる行動の推測が難しいと考えられる。

このAセクシュアルゆえの特徴は「性的指向の有る人を誤解させる」だけでなく、性被害にあうリスクにもつながると推測する。相手は自分に恋愛感情を持っていないため、1人でその人の家に遊びに行ったり、車に乗ったりしても問題ないだろうと考える。しかし、相手によっては「一人で自分の家を訪問した」「一人で自分の車に乗った」という行動を根拠に、性的同意を確認することなく、思い込みで性的行動を起こす可能性もある。当然、性的行動の前に相手の同意を明確に得る必要がある。それにも関わらず、「暗黙の了解」として、性的行動が行なわれることも少なくない。さらに、Aセクシュアルは意識しないまま性的行動の場面（状況）に居合わせることも考えられる。Aさんは「相手は自分に恋愛感情を持っていないので、家に行っても大丈夫」と判断したが、性被害にあうリスクは双方の恋愛感情の有無に関わらず存在するため、リスクを回避するためにソーシャルスキルのような形で身につける必要があるだろう。しかし、学校教育等においてこのようなセクシュアリティの特徴をふまえた性教育は行なわれてこなかったと考えられる。

今回、当事者学生3人にAセクシュアルであることのリスクについて尋ねた際に性被害にあうリスクをあげたのはシスジェンダー女性のAさんだけであった。しかし、男性であっても性暴力の被害にあうことは考えられる。実際、2018年の犯罪白

書の「強制性交等・強制わいせつの認知件数」等において、男性の被害も確認されている²⁵⁾。文部科学省が、2020年6月12日に出した「性犯罪・性暴力対策の強化の方針の決定について（通知）」²⁶⁾でも、「男性やセクシュアルマイノリティが被害に遭った場合、被害を申告にしにくい状況があること」が指摘されている。また、加害者は男性に限らず、女性の場合もある。したがって、性暴力の加害者及び被害者は性別によらないことを認識し、性別に関わらず性被害に合うリスクとともに性的同意について認識する必要がある。

5. Aセクシュアルの存在も意識した学校教育のあり方

本研究の課題の1つとして、Aセクシュアルは学校教育で見えない存在になっているために、セクシュアリティに応じた教育を受けられていない可能性について指摘した。そのため、Aセクシュアルにも対応した教育について提案したい。

(1) セクシュアリティの特徴を認識し、肯定的なメッセージを示す。

教員はAセクシュアルというセクシュアリティを認識し、「好き」という感情を持たない状態について肯定的なメッセージを示してほしい。全学校種のほとんどの教科書において、思春期以降に人は異性に恋愛感情をもつと記されており、近年では異性だけでなく同性も加えて記載することがじょじょに増えてきた²⁷⁾。異性愛に加えて、同性愛及び両性愛等の存在も明確に示したことは、子どもたちにとって性的指向は異性愛に限らないことを認識できるため、大きな意味がある。

一方で、性的指向が有ることのみを強調することは、まだ恋愛や性的に惹かれることを自覚していない子ども及びAセクシュアル当事者にとってプレッシャーになりかねず、自己の存在について疑問を抱くことも考えられる。不安を覚える子どもに対して、「いずれ好きな人ができる」「まだ出会っていないだけ」という言葉をかけることは、性的指向の有ることのみを肯定するというメッセージにつながりかねない。そのため、性別に関わらず恋

愛は素晴らしいものであると同時に恋愛が無くても素晴らしい人生を送れるというメッセージを伝えてほしい。

人によって恋愛は人生において必須ではないが、今日の学習指導要領では性的指向の有る人のみが前提になっているため、特に恋愛の関心が高まるといわれる中学生や高校生は周囲の生徒の話や使用する教科書の記述内容より、性的指向の無い自分に疑問を覚え、不安が生じることも考えられる。教員等大人が A セクシュアルの存在も認識することで、子どもたちに正しい知識が伝わり、その結果当事者の子どもはセクシュアリティを肯定的に捉え、自身の将来について恋愛にとらわれず考えることができるし、性的指向の有る子どももより多様な価値観を持ち、恋愛や結婚に関して自身の人生の選択の幅が広がるだろう。

(2) A セクシュアルも視野に入れた性教育の実施

A セクシュアルも視野に入れた性教育を考えてほしい。性教育の包括する範囲は広く、さまざまな内容があるものの、多くは性的指向の有る人を前提にしていないだろうか。学校は子どもたちに必要な知識やスキル等を教える場所であるため、性的指向の無い A セクシュアルも教育対象として想定する必要がある。A セクシュアルに必要な性教育の内容とはどのようなものか。

種々考えられるが、まず、A セクシュアルの人は性被害にあいやすい場面を認識する必要がある。学べる教材の例として、京都市男女共同参画推進協会と関西の大学生が協働して作成したハンドブック「必ず知ってほしいとても大切なこと。性的同意」²⁸⁾や内閣府が作成した令和 2 年度の「性暴力を、なくそう」をテーマにしたポスター・リーフレット²⁹⁾をあげたい。これらのとりくみは、性に関わる行為について、暗黙の了解とせず性的同意をとることで、性暴力の加害者及び被害者にならないことをめざす。例えば、ハンドブックは性的同意を必要とする場面について具体的に以下のように記す。「家に泊まるのは、性行為をしてもいいというサインだ」「ナイトクラブに来る人は出会いや性的交遊を求めてくる人が多いので、性行為に際して同意を取る必要はない」等をあげて、「一つでも

あてはまるなら、“性的同意”は取れていない」と明確に示す。

内閣府のポスター・リーフレットにも「家に来てくれても」「どんな服装でも」「ボディタッチされても」「二人きりで食事しても」等をあげて、「相手の同意のない性的な行為は、性暴力です。」と記す。性的指向の有る人にとっては「性的同意」をする、しないという選択を要する場面であるが、A セクシュアルにとっては選択以前に「このような場面は性に関わる」と認識できる。本研究の調査において、調査協力者は「相手の恋愛感情を知らなかったとはいえ、家に行った」と話した。「家に行く」ことは、京都市のハンドブックの性的同意を必要とする場面の例にとりあげられていないが、内閣府のほうにはとりあげられているため、性的同意に関わる複数の資料を用いることで、さまざまな性的行動に関わる場面を想定できるだろう。

ただし、ハンドブックにも「根拠のない思い込み」「勝手な決めつけ」「無知」とあるように、同意を取らずに性的行動をする側に全ての問題がある。したがって、A セクシュアルが性的場面を想定せず、家に行って性被害にあった場合でも、その人には何の落ち度もない。しかし、被害を避けるためには性被害を受けるかもしれない場面を想定し、できるだけリスクを低くする必要がある。また、性被害の加害及び被害は性別関係なく起こりうるため、性教育は全ての人に行なわなければならない。本研究は A セクシュアルを対象にしたため、A セクシュアルに関わる教育として提案したが、防犯という意味で年齢を問わず活用できる可能性がある。

おわりに

本研究は、A セクシュアル当事者学生 3 人のインタビュー及びディスカッションより、セクシュアリティに対する自己認識と将来展望を調査した。その結果、(1) A セクシュアルの特徴は人によって異なる(グラデーションがある)、(2)「好き」という気持ちは共感ではなく分析の対象である、(3)自身のセクシュアリティについて自覚した時から肯定的に受け入れているが、性の多様性の知識や特に性的指向の有る人(性的マイノリティ・マジョ

リティ関わらず)との交流を通して、さらに肯定的にセクシュアリティの自覚を深め、将来設計をたてていく過程を示した。

一方で、セクシュアリティの特徴ゆえのリスクも存在する。A セクシュアルは、自身に向けられた感情や相手の行動について、恋愛感情や性的欲求と結びつけて認識することが難しい。A セクシュアル全体の傾向は不明であるものの、少なくとも本研究の調査協力者は相手の性別によって態度を変えることはなく、等しい距離感で接している³⁰⁾。性別で区別することなく人に接する態度は、人と交流するうえで美点といえるだろう。しかし、性的同意をとることが徹底されていない社会において、性別に関わらない距離感で接することによって、性被害にあうリスクが高まることが考えられる。そのため、A セクシュアルは「性被害を受けるかもしれない場面」や「性に関わる場面」を認識するという対策を講じることで、そのリスクを軽減できると考える。学校教育は、このような特徴を有する A セクシュアルの子どもの存在も視野に入れて、教育を行なう必要がある。

セクシュアリティは人生設計をたてるうえで欠かせない要素である。そのため、流動性を念頭におきつつも現在の自身の状況を認識し、希望をもって将来をイメージできるように幼い時から性の多様性について適切に学ぶことは意味がある。性の多様性について学ぶことは、全ての人にとって必要である。なぜなら、性的マジョリティであっても日常生活に関わる人間関係の中に必ず性的マイノリティの人は存在するし、セクシュアリティにはグラデーションやスペクトラムという特徴もあるため性的マイノリティ・マジョリティの線を引くことは難しい。また、性の多様性を学び、認識し受容することは、特定のセクシュアリティを生きやすくするだけでなく、それ以外のセクシュアリティの人生の選択の幅を肯定的に広げることにもつながる。

2015年の通知をきっかけに、学校はじょじょに性的マイノリティの児童生徒を視野に入れて授業や生徒指導を行ない始めた。しかし、学校が想定とする性的マイノリティはトランスジェンダーや同性愛者が中心であり、A セクシュアルやクエスチ

ョニングや X ジェンダー等は認知されていないことが多い。よって、学校は認知していないセクシュアリティの生徒指導や授業について適切に行なえていないことが推測される。A セクシュアルについては、その特徴によるリスクや自身への疑問やストレスを抱えている状況がみえてきた。本研究は A セクシュアル当事者学生 3 人を対象にした。3 人は性の多様性に関する知識を持ち、学ぶ機会もあり、他の性的マイノリティとの交流の機会もある大学生である。人数も少なく属性に偏りがあるため、彼らの調査結果を一般化することはできない。しかし、日本において A セクシュアル当事者の状況のわかる研究はほとんど存在しないため、課題を認識しながらも当事者(当事者かもしれない人)や大人に対して A セクシュアルの実態を伝える必要を感じており、インタビューをまとめることとした。今後、さらに A セクシュアルに関する量的な研究及び事例研究が蓄積されることを期待している。

註

- 1) 近年、LGBTQ の表記が多く使われるようになってきたが、本研究では LGBT と記す。
- 2) 2019 年 4 月～5 月に、株式会社 LGBT 総合研究所(博報堂 DY グループ)が、全国 20～69 歳の 42 万 8036 名にアンケート調査を行なった。有効回答数は 34 万 7816 名。ただし、LGBT の言葉の意味まで理解しているセクシュアリティの理解率は 57.1%である。
- 3) 例えば、静岡大学の全学教職課程の 2020 年度後期の必修授業「教育と社会」の受講生 36 名(理学部及び農学部。3 年生 35 名、4 年生 1 名)に「LGBT」及び A セクシュアルの認知について質問したところ、「LGBT」の認知率は 100%だったが、A セクシュアルを認知している人は 2 人だった。
- 4) ジュリー・ソンドラ・デッカー著、上田勢子訳『見えない性的指向 アセクシュアルのすべて—誰にも性的魅力を感じない私たちについて』明石書店、2019 年。

- 5) 柿沼賢治、布施木誠「性的マイノリティにおける無性（A セクシャル）の概念の可能性—A セクシャルの論文のレビュー」『聖マリアンナ医学研究誌』11(86)、2011年。柿沼賢治「A セクシャルにおける量的研究について—A セクシャル論文のレビュー (2)」『聖マリアンナ医学研究誌』13 (88)、2013年。吉岡真梨子「Asexual という自覚はいかにしてなされ自己受容されるのか—ライフストーリー・インタビュー調査による事例から—」『学習開発学研究』12、2019年。松浦優「メランコリーのジェンダーと強制的性愛—アセクシャルの『抹消』に関する理論的考察」『国際基督教大学ジェンダー研究センター』15、2020年。柿沼賢治「A セクシャルと HSDD の比較および歴史的背景とコミュニティの存在について」『聖マリアンナ医学研究誌』20 (95)、2020年。など
- 6) Aro/Ace 調査実行委員会 2020
「アロマンティック/アセクシャル・スペクトラム調査 2020 概要報告」
<<https://ace-communitysurvey.jimdosite.com/>>（最終閲覧 2020年11月17日）
- 7) 本調査は「性自認区分」と「性的指向区分」に分けて調査結果を出している。A セクシャルは性的指向に関わるセクシュアリティであるため、「性的指向区分」に着目すると異性愛者 93%、同性愛 0.9%、両性愛 2.8%、無性愛（A セクシャル）0.9%、クエスチョニング 1.4%、その他 1.0%の分布になる。
- 8) 前掲註 4)、16 頁。「私は誰にもまったく性的魅力を感じたことがない」の回答率は 1%であった。
- 9) 同上書、36 頁。日本において A セクシャルは、性的に惹かれず恋愛感情を抱かない人を指し、恋愛感情は持つが性的に惹かれない人をノンセクシャルとしているように、分けることもあるが、本研究では A セクシャルは上記したイギリスの定義を用いる。そのため、どちらの状態も A セクシャルとして捉える。
- 10) 同上書の説明によると、デミセクシャルは知らない人やスター等に魅力を感じず、親しくならないと性的魅力を感じない (67 頁)。また、グレイセクシュアルは「性的魅力を感じる時期とそうでない時期がある」という特徴がある (65 頁)。その他の A セクシュアルのタイプについては『13 歳から知っておきたいこと LGBT +』(アシュリ・マーデル、須川綾子訳、ダイヤモンド社、2017年、173~185 頁。) に詳細に記載されている。この他、「アロマンティック/アセクシャル・スペクトラム調査 2020 概要報告」(前掲註 6)) でも説明がある。
- 11) 松尾由希子「学校教育と社会における性的マイノリティに関する言説研究」『静岡大学教育研究』第 9 号、2013年。松尾由希子「学習指導要領におけるセクシュアリティの解釈と歴史 (1)」『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』25、2016年。
- 12) 松尾由希子、掛本健太、小堀春希、井出智博「特別活動における性教育のカリキュラム開発—集団指導と個別指導の違いに着目して—」『静岡大学教育研究』第 14 号、2018年。松尾由希子、小堀春希、掛本健太、井出智博『『考え、議論する』道徳の授業実践 (1) —性の多様性をとりあげた教材研究を通して—』『静岡大学教育研究』第 15 号、2019年。近年、性の多様性について最も取り上げている学校種は高校である。2016 年度検定済教科書について家庭科全 17 点中 10 点に、2017 年度検定済教科書について公民科（政治・経済）全 7 点中 2 点、公民科（倫理）全 4 点中 1 点、地理歴史科（世界史）全 4 点中 1 点に、性的マイノリティや性の多様性に関する内容を記載している。
- 13) 春日寛、原ひろ子監修、横山哲夫ほか 47 名編集『新家庭基礎 21』実教出版、2017年、16 頁。
- 14) C さんは共通教育科目の「多元的共生社会論」において静岡大学 LGBT サークル grandiose のメンバーが性の多様性の説明をした際に、A セクシャルについて知ったという。
- 15) 日高庸晴氏の作成した「ゲイ・バイセクシュアル男性の種々のライフイベントが起こる平均年齢」(日高庸晴、木村博和、市川誠一「ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート 2」厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究推進事業、2007年。) によると、ゲイについて 13.1 歳で「ゲ

- イであることをなんとなく自覚した」、17.0歳で「ゲイであることをはっきりと自覚し」ている。中塚幹也によると「性同一性障害」の人について、性別に違和を感じ始めた時期として、小学校入学前までをあげる人は56.6%である（中塚幹也『学校保健における性同一性障害—学校と医療との連携—』『日本医事新報』4521、2010年。）。一方で、Aセクシュアルは当事者学生3人のほか、『静岡新聞』（大瀧麻衣『『SOGI（ソジ）』性的指向と性自認 多様な性のあり方知って』『静岡新聞（朝刊）』2020年8月25日）に掲載された「性的指向は誰も好きにならない」ケイさんが自身のセクシュアリティを知ったのは30代に入って結婚してからであり、『朝日新聞』に掲載された3人の当事者のうち50代女性（「アセクシュアル 私ほ女子組」『朝日新聞（夕刊）』2019年12月18日。）は1年前に、他の2人（「無<ア>セクシュアル 女子組」『朝日新聞（夕刊）』2019年11月13日。）は大学4年生と17歳の時だった。
- 16) 例えば、ある高校保健体育の教科書には「性への関心・欲求と性行動」の項に『『異性と親しくなりたい』という気持ちや性に対する関心は、思春期になるにつれ男女ともに高まってきます。しかし、性的欲求の強さやあらわれ方には、男女の違いがはっきりとみられます。また、これらには個人差もみられます。』（『最新高等保健体育』大修館、2012年、66頁。）とある。
- 17) 砂川秀樹『カミングアウト』朝日新聞出版、2018年、24頁。
- 18) 石丸径一郎『同性愛者における他者からの拒絶と受容—ダイアリー法と質問紙によるマルチメソッド・アプローチ』ミネルヴァ書房、2008年、139頁。
- 19) 2020年10月19日の「あさいち」（NHK）の「子どもにどう教える？“性”の話」特集の性的同意に関する話題の中で、間違った常識の1つとしてあげられていたのが「家についていたらセックスOKのサイン」である。このことから、言葉で確認がなくても家に行くという行動で性的合意をとったと誤解する人は一定数存在し、その結果、本人が想定しない状況で性被害にあらう可能性が高いこともうかがえる。
- 20) セクシュアリティの流動性という特徴も認識しているため、将来の自身のセクシュアリティはわからないと考えてもいる。
- 21) 福本美樹「性同一性障害当事者が抱える困難と困難を乗り越える要因」『学校メンタルヘルス』19（2）、2016年、169頁。など
- 22) 新聞（前掲註15）、『朝日新聞』2019年12月18日）に掲載されたAセクシュアル当事者も、自身のセクシュアリティを知った時の気持ちとして「知ってほっとした。」「概念を知った時安堵を覚えた。」と語っている。
- 23) 近年、BLを分析対象にする研究（溝口彰子『BL進化論—ボーイズラブが社会を動かす』太田出版、2015年。ジェームズ・ウェルカー編著『BLが開く扉—変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー』青土社、2019年。堀あきこ、森如子『BLの教科書—ボーイズラブを研究する！』有斐閣、2020年。など）が増えてきており、その中には当事者によるBLの捉え方を分析した研究（前川直哉「ゲイ男性はBLをどう読んできたか」『BLの教科書』など。）もある。また、日本では2020年に入って主にタイBLドラマを特集したアジアBLドラマの雑誌（『BE LIGHT—アジアBLドラマガイド』コスミック出版、2020年。『タイドラマガイドD』東京ニュース通信社、2020年。）も刊行されており、人気の高さがうかがえる。
- 24) 例えば、2020年に放送されたドラマ「30歳まで童貞だと魔法使いになれるらしい」（テレビ東京、2020年10月9日～12月25日）には、主人公の同僚に「恋愛がなくても毎日を楽しく生きている女性」（藤崎さん）が登場する。ドラマの中ではAセクシュアルという言葉は出てこないが、脚本家の吉田恵里香氏はインタビューの中で「この作品では、藤崎さんをアセクシュアル（他者に性的感情を感じないセクシュアリティのこと）やアロマンティック（他者に恋愛感情を感じないセクシュアリティのこと）にしたいと話したら、誰も否定しなかった」と語る。文中の「誰

も否定しなかった」という箇所は、制作スタッフから反対の声が出なかったという意になる。

横川良明「沼墜ち続出ドラマ“チェリまほ”の多様な世界はどうやってつくられたのか【脚本家・吉田恵里香さん】」（2020年12月22日掲載）

https://mi-mollet.com/articles/-/27045?page=2&per_page=1&device=smartphone#google_vignette（最終閲覧2020年12月28日）

- 25) 平成30年版(2018)『犯罪白書』「強制性交等・強制わいせつの認知件数」（第1編第1章第2節）によると、強制性交等の1307件中女性の被害は1251件であるが、男性も56件の被害にあっている。また、強制わいせつの5340件中女性は5152件であるが、男性も188件の被害にあっている。また、平成29年度(2017)の内閣府による「男女間における暴力に関する調査」中の「無理やりに性交等された被害経験」が「ある」と回答した人の中で女性は7.8%であり、男性も1.5%存在する。

法務省「平成30年 犯罪白書」

<http://hakusyo1.moj.go.jp/jp/65/nfm/mokuji.html>
（最終閲覧2020年10月28日）

内閣府男女共同参画局「平成29年度 男女間における暴力に関する調査」

http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/evaw/chousa/h29_boryoku_cyousa.html（最終閲覧2020年10月28日）

- 26) 文部科学省「性犯罪・性暴力対策の強化の方針の決定について（通知）」

https://www.mext.go.jp/content/20200716-mxt_kyousei01-000008930_01.pdf（最終閲覧2020年11月27日）

- 27) 前掲註11)、「学校教育と社会における性的マイノリティに関する言説研究」23～26頁。例えば、2002年度検定済教科書以降、「高校生である私たちは、自分の性に悩み、同性や異性について関心が高まることがある。」(2012年度検定済の『家庭基礎』(見本本)、開隆堂出版、14頁。)というように性的指向の対象を異性に限らないと伝える教科書も存在している。

- 28) 公益財団法人京都市男女共同参画推進協会、2018年8月。PDF版もある。

- 29) 内閣府による「女性に対する暴力をなくす運動」(令和2年11月12日～25日)のテーマである。

内閣府「性暴力を、なくそう」

https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/no_violence_act/index.html（最終閲覧2020年11月27日）

- 30) 3(5)で、Bさんは「男性も女性も恋愛対象にならないため、相手を意識しなくてもよい」と述べる。Aさん及びBさんは「恋愛の距離感がわからない」「距離を誤ったかもしれないと思う時はある」と述べており、距離感について困惑している様子うかがえるが、同時に性別に関わらず人と交流していることがわかる。

【謝辞】

本論文作成のために協力してくださった4人の学生と1人の卒業生に感謝申し上げます。